大学での勉強は
ここが違う!!
特集4

英語を毎日インプットしよう

NOBUO YUZAWA
湯澤伸夫

経済学部助教授。
平成元年、東北大学大学院文学研究科言語学専攻修了。専門は英語音声学、特に音響音声学。最近の主な関心事は、音調核音節の存在意義、プロソディ（特に基本周波数）の物理量と知覚量の相違、知覚量測定のためのCCSの役割、TSMsやToBI等の表記特徴である。

な学習法に陥らないことと、毎日必ず学習することである。

英語学習を困難にしている要因には、こうした外的要因ばかりでなく、統語構造や音韻構造の違いという内的要因もある。そのため、英語学習にはかなりの努力と覚悟が必要であり、自分で英語学習環境を作り、毎日読んだり聞いたりして、英語を絶えずインプットすることが重要である。我々は英語教員として授業に最善を尽くすが、週２回の授業だけで英語を身に付けられると考えては大間違いである。日頃から自主トレーニングをし、授業は試合と考えてほしい。どんな選手でもトレーニングなしに、試合に出ることはあり得ない。これと同じ理屈である。決して楽なことではないが、英語を本当に身に付けたいと思うならば必ず実践してほしい。卒業までに英検準１級または１級を取得できれば、就職にも大いに役立つはずである。

特別の条件がない限り、人は母語を自然に身に付ける。人には生得的言語能力があり、ある言語刺激を受けると、その言語を母語として習得すると考えられる。外国で生まれ育った子供の言語習得を見れば分かる通り、この言語能力は両親の言語とは無関係の普遍的実体である。しかし、この能力は永続的に存在するのではなく、時の経過とともに衰え、次第に別の言語刺激を与えても母語を習得した時の反応をしなくなる。この状態が日本語環境のみで育った一般的な日本の大学生の言語実態である。一端固定化した言語能力を柔軟に戻すには、かなりの努力を必要とするのは言うまでもない。しかも、臨界期を過ぎてから言語を学習しても、母語と同じレベルでその言語を操ることは一般的にほぼ不可能という現実があることも自覚しなければならない。

我が国の英語教育では文法訳読方式が中心的位置を占めてきた。この方法は時間をかけて難解な書物を読むには有効な面もあるが、英語の流れに沿って読む習慣を育成することは難しいし、情報が瞬時に消える会話には不向きという欠点も有する。口語英語の重要性が叫ばれてから、文法訳読方式は我が国の英語教育の癌だと言う見方もあるが、挨拶程度の簡単な会話がいかにうまくできても、それだけでは不十分であることは言うまでもない。大切なことは、極端

何ですかという質問が来るらしい。日本人には気付かない音の違いを外国人が気付くというのは興味深いことである。なお、例えば、sum・sun・sungの違いを正確に発音し聞き取るためには、3つの「ん」の違いに敏感になる必要がある。その意味で、日本語では異音としてしか認識していない音を、英語で音素として認識できるようになる必要がある。

この二つの基本練習を十分行うと、口語英語の基礎作りにかなり役に立つはずである。この練習では標準米音または標準英音を使うことになるだろうが、英語には様々な種類があることを忘れてはならない。つまり、様々な種類の英語音に耳慣らしをすることにも挑戦してほしい。教室や語学番組で耳にするのは標準米音または標準英音がほとんどであり、それは世界で使われている英語の一部に過ぎない。第二言語または公用語として使用している国々もあるし、仕事等で外国語として使っている人々もいる。そうした英語には当然お国訛りがある。また、アメリカ英語やイギリス英語と呼ばれている英語は、どちらも一枚岩ではなく地域訛りがある。こうしたいろいろな種類の英語にも触れておかないと、将来仕事で標準アクセントと異なる英語を話す人と商談する必要に迫られた時に、十分な対応ができない危険性もある。映画等のいろいろな教材を用いて、様々なタイプの英語に挑戦してみる価値は十分ある。

日本人に特に苦手な音声の分野では、単に英語を毎日聞き流すだけでなく、少しの工夫が必要である。その工夫とは、英語音声の特徴を学習することである。そのためにはまず発音記号の学習を含め、英語音素を徹底的に反復練習することである。日本語音素は母音も子音も英語音素より非常に少ないので、英語音素をしっかり学習し、身に付けることは必要である。例えば、いつまでもhardとheardの発音が同じでは困る。自分で正確に発音できるようになると、その音を聞いた時に聞き取りやすくなるという理論もあるので、これは是非実行してほしい。英語音声を片仮名で表記するのにはどうしても無理があるので、発音記号の習得は重要である。発音記号を身に付けていれば、未知の語を辞書で見た時に、躊躇なく正確に発音できる。

次に必要なことは、同化や脱落等の音声変化を学習することである。音素の練習だけで十分とは言えないのは、多くの場合、現実の音声は辞書の見出し語の発音記号通りではなく、様々な変化が加わるからである。例えば、red paintの/d/は[b]に変化し、first classの/t/は脱落し、must have beenのhaveがofと同じように発音されるといった具合である。こうした現象を理解しておくと、実際に同じような現象に直面しても、慌てずに正確な意味を取れるようになるばかりでなく、自分の英語もより英語らしくなる。話は少しずれるが、日本語にも日本人が普段気付かない様々の音声変化がある。例えば、「三枚」「三段」「三階」の「ん」は調音される位置がそれぞれ異なり、鼻音という共通項以外は全くの別物であるが、日本人はこの違いを意識しない。意識する必要がないからである。しかし、外国人に日本語を教えていると、この「ん」は

最近面白い本を読んだ。斎藤兆史著『英語達人塾』中公新書である。日本人の学習環境の視点から、英語の効果的な学習法について書いてある良書である。是非一読してほしい。